

2024年6月30日聖霊降臨後第6主日説教

申命記15章7-11節

コリントの信徒への手紙25章14-21節

マルコによる福音書5章22-24、35b-43節

聖書日課B年からの学びも二回目となりました。一回目は、まだコロナ禍のただなかの2021年でしたので、聖堂で一緒に礼拝をすることができませんでした。時の流れの速さを感じると同時に、今、制限なく皆様と一緒に礼拝ができますこと、改めて恵みとして感謝したいと思います。

さて、本日の福音書のお話は、会堂長ヤイロという人の娘さんの病気の癒しのお話です。しかし、マルコ福音書の物語には、そのお話の途中に、もう一つ別のお話が挟み込んであります。その部分は、聖書日課では、《かっこ》でもなく完全に省略されています。省略されたのは、一二年間出血の止まらない女性が、イエス様によって救われるお話です。

一つのお話の中に、もう一つ別のお話を挟み込む形式は、マルコ福音書の特徴とされています。ただし、このお話は、マタイ福音書にもルカ福音書にもあり、長さや細部は異なりますが、一人の指導者(マタイ)・ヤイロという会堂長(ルカ)とその娘さんのお話、十二年間出血の止まらない女性のお話を組み込むような形になっています。マタイとルカは、マルコを元にして書いたもので、単に同じような形式になっているとも説明できます。しかし、マタイとルカの著者も、このような挟み込む形になっているからこそ意味があると考えたともいえます。

ただし、聖書日課がそうしているように、挟み込んだであろう話を削除して、前後をつなぎ合わせて、もともとあったであろう一つのお話を浮かび上がらせることができます。同じようなことは、マルコ福音書の2章1-12節でも起こります。しかし、このような挟み込みの形式は、著者が意図してそのように書いたと思われるので、挿入されたであろう部分を引き抜いて修復するような作業は、その著者の意図を無効にしてしまうことになると思います。たとえ、著者が挟み込まれた形のお話を受け取り、そのまま採用したのだとしても、そこに意味を見出したことには変わりません。

それでは、なぜ聖書日課のような、削除して修復するというような作業が起きてしまうのでしょうか。それはマルコ福音書という物語が、何を語っているかを知ろうとするからではなく、マルコ福音書という資料が、どのような歴史的事実を示しているかを知ろうとするからでしょう。それは近現代的な歴史偏重主義の結果と言えます。そのように考えますと、そのような近現代的関心を持たないからこそ、マタイやルカの著者は、そのままマルコの形式を採用したのだといえます。近現代的な歴史的観点から、過去に何が起きたのかを探ろうとする努力は大切です。しかし、その作業における過去への認識は、様々な点的出来事をつなぎ合わせ、それをまとめたフィクション(虚構)化を通して行われます。それは物語化とも言えます。また、物語化することなく、点的出来事の集合を一言で言い表す、あるいは一つの記号として言い表すこともできますが、それもフィクション(虚構)化の一つです。その意味では、一つのお話の中にもう一つのお話を挟み込んだ形にしたからこそ、

イエス様の福音がもっともよく伝わると、フィクション（虚構）化した著者の意図こそが大切なのです。

それでは、十二年間出血の止まらなかった女性の物語を挟み込むことによって、著者はいったい何を語ろうとしているのでしょうか。それは明白に対比された二人の信仰者の姿です。二人とは、会堂長ヤイロと十二年間出血が止まらなかった女性です。新しい聖書協会共同訳もこの個所の見出しを「ヤイロの娘とイエスの服に触れる女」としていますが、この個所で対比されているのは、ヤイロと女性に他ならないと思います。

まず人物的条件から考えますと、一方は、男性であり、ヤイロという名前が記されており、会堂長でもあるので、社会的にも宗教的にも、おそらく経済的にも恵まれた人物です。娘がいるということですから、結婚もしていた人です。

他方、女性の方は、名前の記載はありません。十二年間出血の病のため医者からもひどい目にあっており、全財産も使い果たしていました。その病のため結婚もできなかった可能性もあります。彼女は、身体的、社会的、経済的、宗教的に、そしておそらく精神的にもひどい状態であった人です。

動作の面から考えますと、ヤイロは、大勢の群衆の中でイエス様に（おそらく「前」から）ひれ伏して、言葉をかけて願います。確固たるイエス様への信頼・信仰を持ちそれを告白したのです。しかし、娘が死んだと告げられると、イエス様はから「**恐れるな、ただ信じなさい**」と言われますので、それを失ったようです。また「**子は死んだのではない、眠っているのだ**」とイエス様が言われた時、嘲笑った人々の一人とも考えられます。ただし、イエス様によって娘が起き上がって歩きだすと、驚く人々の一人となります。

女性は、群衆に紛れこみ、「**せめて、この方の衣にでも触れれば治していただける**（直訳：救っていただける）」と思い、イエス様の「後ろ」からその衣に触れ、イエス様が意図しないうちに奇跡を起こし、イエス様に探され、イエス様にすべてを話し、イエス様から「**娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。病苦から解放されて、達者でいなさい**」と言葉をかけられます。イエス様が彼女を必死に探したのは、彼女の苦しみを全て受け止め、そして彼女の身体的・精神的・霊的全体性を持った救いを宣言するためでした。彼女はその信仰を認められたのでした。

上記の他にも対比されることはまだありますが、この二人から三つのことを学びたいと思います。一つは、ヤイロのような自分の希望が叶わないとわかると弱くなってしまふ信仰ではなく、名もない女性のように自分の願いや思いを超えてイエス様を唯一の救いとするような信仰が尊いということです。もう一つは、イエス様は一二年間苦しんだ女性の病の治癒だけではなく、すべてを受け入れて全体を救う方であるということです。そしてもう一つは、たとえヤイロのような信仰であったとしても、イエス様はその望みを叶えてくださるということです。

今日、わたしたちの世界には、一二年間以上も続く苦しい出来事もあります。また祈っても、願っても、解決しない病や悲しみもあります。本日のお話しよりも希望を失ってしまうような悲しい出来事も多いかもしれません。しかし、だからこそ、それでもイエス様が導いてくださる。そのことを希望としたいと思います。その希望からまことの平和を願って歩んでいきたいと思ひます。